

## 大野 榮人

Interviewer

進研アドBetween編集長  
長田 雅子

厳しさと思いやりのある  
教員の熱意に触れて  
学ぶ楽しさを知ってほしい

経済学部の新設、名城公園キャンパスの開校など、新たな動きが活発な愛知学院大学。「4年間で自分自身を変える体験をしてほしい」と語る大野学長に、自身の教育観と、大学がめざすこれからの方向性について聞いた。

### 個々の授業を改善し 教育の質向上を図る

長田 学長ご就任3年目を迎えられたとうかがっています。貴学の現状をどのように捉えていますか。

大野学長(以下大野) 就任当初から教育の質向上を特に重視してきました。2018年から18歳人口の減少が再び始まり、大学がさらに厳しい状況を迎えるのは明らかです。それまでに教職員が必死になって改革を進めなければ、世間から無用の長物として扱われかねない。そんな危機感を抱いています。

そこで本学は、大学の価値を向上させるためにさまざまな施策を実行しています。直近では、2013年の経済学部新設と、2014年の名城公園キャンパス開設がこれにあたります。2013年は本学の教学の課題を明らかにし、教育の質を高める勝負の年にしたいと思っています。

キャンパス開設も学部新設も、すべては私たち愛知学院大学がこれまで以上に社会に認められ、選ばれる大学になるためのステップです。明確なビジョンを社会に示し信頼を得られなければ、学生にとっても大学にとっても、明るい未来はないと思っています。新しい学びの提案と、それにふさわしい環境づくりが急務です。限られた時間の中で私たちは、危機感と切迫感を共有し、一刻も早く新しい愛知学院大学像を確立していきたいと考えています。

長田 教育改革で重視していることをお聞かせください。

大野 個々の授業を改善することが重要なポイントだと考えています。教員が一丸となり、学生が自ら進んで「授

業に参加したい」といった意欲を持てる内容にしなければなりません。本学では学生による授業評価アンケートを実施していますが、改善を進めるにはこれだけでは不十分です。厳しい授業を行う教員の評価が低いこともあるからです。そこで、教員には、相互に授業参観をして評価し合ってください、そして授業をより良いものにしてください、と言っています。

授業方法についても一方的な講義スタイルではなく、学生が積極的に発言する双方向型の授業に変えていきます。さらに、個々の学生の理解が確かめられる少人数での授業を増やしたいと考えています。

### 厳しさの中で 自分自身を変えていく

長田 どのような人材を育てたいとお考えですか。

大野 建学の精神に基づき、自ら考え、行動できる人を育てることが本学の使命です。そして日本だけでなく、海外でも活躍できる、社会を支える底力を持った自立(自律)した人材の育成が目標です。そのためには、学生が積極的に学びたいと思える授業に加え、「厳しさ」が必要ではないでしょうか。厳しさに耐えて学び、自らに打ち勝つことにより、自身の成長や変化を実感できるはずだと思っています。

長田 学長ご自身も、学生時代に厳しい教育を受けられたとうかがっていますが、そこに教育観の根元があるのでしょうか。

大野 そうです。入学早々から「この本を読んで、1週間以内に50枚のレポートを書きなさい」といった課題を

与えられました。入学したばかりの私が、西田幾多郎先生の著書を理解し、さらに50枚ものレポートを書くなんてできるわけがない。そう思い、諦めて最初は提出しませんでした。すると、私の部屋の荷物が外に放り出され、「できないなら出て行け」と一喝されました。

それで目が覚めました。「本気でやらなければいけない」といった自覚が生まれ、必死に取り組むようになりました。助けを求めるあてもなく、自ら切り開くしかなかったのです。最初は苦しくてしかたがありませんでしたが、そうした日々を重ねるうちに、本を読むこと、調べることのおもしろさに気がつき、気持ちが変化していきました。苦しい環境だったからこそ、学ぶことの楽しさが理解できたのでしょうか。私はこの経験がきっかけで、嫌いだった勉強が好きになり、自分を変えることができました。

人は厳しい環境にあつてこそ、学びへの意欲が高まり、そこで得るものがあるはず。大学生活とは、自分を変える4年間だと思います。今の学生にも、厳しい課題を与え、1日に1時間でも2時間でも机に向かう習慣を身に付けさせ、学ぶ楽しさを知ってもらいたいのです。そのために、すぐに実感が湧かなくても、社会に出て振り返ったときに「愛知学院大学で勉強してよかった」と感じてもらえるような、厳しくも思いやりにあふれた学びの場を提供したいと思っています。

### 地域の人々をつくる 大学を核とした共同体

長田 新しい名城公園キャンパスでは



おおの・ひと 1944年生まれ。広島県出身。駒澤大学仏教学部卒業。大谷大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。1975年愛知学院大学講師。文学部長・禅研究所長・図書館情報センター館長・副学長等を歴任し、2010年に学長に就任。専門は中国仏教、天台学、禅観成立史。博士(仏教学)。

どのような学びを実現されるのでしょうか。

大野 名城公園キャンパスには、新設の経済学部のほか、商学部と経営学部のビジネス系3学部が集結します。3つの学部が一堂に会することにより、経済現象を多角的に捉えた教育・研究を行えるため、学部横断的な学びを取り入れる予定です。高校生にとっては、どの学部を選ばよいか、判断の基準が必要でしょう。それぞれの学部で何を学び、どのような卒業後の進路が想定されるのか、明確なプロセスを示したいと思っています。

経済学部では、経済を理論、歴史、政策の3つの視点から捉える教育プログラムを用意します。中でも力を入れるのは政策的アプローチです。地域経済をテーマとした実践的な学びを経て、経済政策に強く、グローバル社会に対応できる、企業や自治体における戦略立案を担える人材を育成したいと考えています。学部と同時に研究所も新設しますので、教員による政策提言も行う予定です。

新キャンパスは、企業や官公庁が集まる中部経済の中心地に置きます。

その立地を生かし、企業や行政と連携を進めてまいります。ビジネスの最先端で活躍する企業人を招いての授業や、学生が現実の課題の解決をめざす授業がビジネス系3学部の大きな特徴となります。インターンシップも充実するでしょう。さらに、隣接する商店街の活性化に、本学の学生のアイデアも取り入れていただきたいと思っています。ほかの商店街の活性化の事例研究から得られた知見も提供していく考えです。地域の人々と協力し合う機会を設け、地域社会の発展に貢献できるような教育環境を実現しようと考えています。

名城公園キャンパスは地域社会との間に垣根がないフラットな設計となっています。中小企業診断士などの資格取得をめざす社会人を受け入れたり、坐禅を組める施設やレストランを地域の方々に開放したりするつもりです。学生にとっては、キャンパスで学外の人々と触れ合い、共に学ぶことができるはず。地域との絆を大切に、大学を核とした新たな共同体のあり方を確立することが、名城公園キャンパスの強みとなると信じています。